

地大隊六を第十四方面軍（比島）に、挺進戦隊四、同基地大隊四を第三十二軍（沖繩）戦闘序列に編入（命第一〇〇六号）。

昭和十九年八月三十一日、軍令甲第一二〇号により、海上挺進部隊第二次臨時編成がなされた。

注 海上挺進戦隊二〇、同基地隊本部四、同基地大隊二〇を編成。次の如く戦闘序列に編入（命第一一三八号）。

区	分	第14方面軍	台湾軍	第32軍
海上挺進戦隊	一〇	五	五	五
同基地隊本部	二	一	一	一
同基地大隊	一〇	五	五	五

である。今井さん所屬の台湾軍（後の第十方面軍）には、海上挺進戦隊 五、海上挺進基地隊本部 一、同基地大隊 一、が編入されたのである。

生死は紙一重

ノモンハンと台湾沖

滋賀県 渡邊 進

私は大正六年四月十日、大阪市大正区大正通六丁目一〇六（当時）、父甚一の長男として生まれました。家族は父母、弟二人、使用人四人の牛乳販売店の家の長男であります。

昭和十二年徴集で甲種合格、入営は同十三年一月十日、和歌山の加太の重砲兵連隊へ入営しましたが、一カ月後身体検査があり、胸部疾患で帰されました。このため私の軍歴にはそのことが記入されず、軍歴とはなっていません。しかし、改めて徴兵検査はありませんでした。昭和十三年一月に動員がかかり、和歌山から満州の阿城へ部隊は移動しました。そこで改めて身体検査があり私は満州行きから除外され、帰郷にされたことが後で分かりました。和歌山には重砲兵連隊が

なくなつたからでありましょう。したがって、私の兵籍簿には、

「昭和十四年三月十日現役兵として旅順重砲兵連隊第一中隊入営、同年八月三日日本部及高射砲中隊編成下令、同日旅順出發……」

とあります。前に申したごとく、昭和十三年一月十日の和歌山入営のことは何も記入されず、階級も昭和十四年三月十日砲兵二等兵とあり、十三年の兵役一カ月は記録がなく空白ということで、無籍者ということでした。

私は十三年徴集兵（大正七年生れ）として、昭和十四年一月、満州関東州の旅順重砲兵連隊入営ですが、召集兵と同じような現役兵だったので。旅順に入つて教育はやり直しましたが、私の扱いは胸部疾患のこともあり、健康保護兵となり訓練も受けさせてもらえず、一期検閲までは見学だった。前年の加太のときは幹部候補生志願でしたが旅順では再提出せずだったので幹候無しでした。

旅順重砲兵連隊は攻城重砲で、一五センチ加農砲と、

二八センチ榴弾砲両方の教育を受けるのですが、主としては加農砲でした。しかし、私は健康保護兵のため見学のみ。検閲後は、観測、通信、一般、車両などで、適性検査で私は通信に回されました。

観測は六人、通信も六人くらい、初年兵、二年、三年兵各々六、七人ぐらい、他は一般に回される。観測、通信採用が少ないのは優秀というか、それで決められるのでしよう。通信は百個ほどの字を見て感度を調べられ選ばれる。観測は数字計算というか数学の得意な者が選ばれました。

私は通信適正となり取られたと思う。車両は自動車運転のできる者、その他一般の人は経験のない大砲故体力のある者でなければ務まらない。私は重砲の砲弾など抱えられない。砲座の開脚はジャッキで上げ、開くのだが、力の弱い私にはできなかつた。重砲隊は相撲取りみたいな大きい人が多く、私は体が一番小さく非力でした。

昭和十四年に動員がかつた。私は初年兵で訓練中でした。動員はノモンハン行きのためでした。そのと

き、私の運命が、死から生に向かったのです。初年兵の私らは未だ訓練中故、ノモンハンへは、昭和十二年徴集の二年兵、十一年徴集の三年兵が一五センチ加農砲二門を持って、一個中隊八十人ぐらい全員出動しました。ノモンハンの戦況不利、苦戦の状況であり、その補充要員としての出動することとなったといわれます。

旅順重砲兵連隊の要塞砲（二十八センチ榴弾砲等）は据え付けたまま、第一中隊は加農砲、第二中隊は高射砲と照空燈で二個中隊編成です。残留者の私は加農砲がないので第二中隊へ編入とは名のみで、私たち初年兵に対し、直ぐノモンハンへ行けと命令が下りました。正規の砲がないので支那事変の鹵獲野砲を持って、内蒙古、ハロンアルシャンへ行かされました。そこでハルハガへ明日にも出動すべく待機していました。そのうち、前線全滅、砲は全部取られてしまったという情報が入りました。我々は北支で戦利品野砲をあてがわれ、先遣隊がハルハガまで行ったが、九月五日停戦協定締結となり私はハルハガへは行かずに済みました。

停戦前の待機るとき、部隊はやられてしまう。我々旅順重砲兵連隊は鹵獲野砲を持っているだけだが、先輩がやられたので仇討のつもり、戦闘帽など捨てて鉢巻きで行かせてくれと隊長に言うほどの意気込みでした。あわて者の中には帽子を破ってしまった者もいて、死を決していたので大変な意気込みでした。

ハロンアルシャンでの待機の時のことを重複することもありますが話をしてみます。そのとき部隊の十五センチ加農砲など兵器は捕られて無い。我々は補充に行ったが、重砲は同じ第一中隊で全滅（部隊がノモンハン出動後私は第二中隊）、第二中隊は高射砲から旅順に残っていました。

私が十三年に入営した和歌山加太の重砲兵が満州へ移った阿城重砲も動員されハルハガへ行かされたと聞きます。重砲は本来後方から撃つのだが、ハルハガでは重砲が第一線に出て戦った。ソ連の砲弾が飛んで来るが、我が十五加農砲弾が敵の陣地に届かないという阿城のは新しい九六式十五加農だといっていたがどこで戦ったのか分からぬ。先ほど申したように、阿城重

砲は和歌山が行った部隊だったので関心がありました。

ハロンアルシヤン、興安北省の先がノモンハン地区で満州里から西の方でした。我々は対空双眼鏡で監視任務を持たされ、ハロンアルシヤンの山の上からハルハガを見たら、部隊らしいのが来るのが見えて、第六軍の参謀が飛んで来られこれを報告した。帰って来たのは日本軍のように思われたが、見たときは多勢の部隊が流れるように来るので、参謀は「よく見付けてくれた」と褒めてくれ、それに応ずる警戒命令が出された。

上空にソ連のミグ戦闘機が飛んで来て、銃撃を受けたり空爆もありました。場所がノモンハンの続きでしたから。あの地方にはパオ（原住民の天幕式住居）があり、夜間あちこちから信号の点滅がありました。蒙古人・白系露人が多かったからでしょう。山の監視所へは自動車で行くが、途中で狼など多く出てきた。待機の期間は二カ月間ぐらいでした。停戦協定が出たので旅順へ戻ったが、その間は三カ月ぐらいでした。私が胸部疾患で昭和十二年現役でそのままいたら、阿城

に移動した和歌山太加重砲にいても、旅順重砲兵連隊にいても、ノモンハン事件に出動し、他の戦友と同様に戦死していたでしょう。これが、生死を分けた第一回目です。

旅順重砲は空になっていて、重砲の跡に満州第一二一六部隊が入っていて、そこへ我々は帰りました。その部隊は一五〇人ぐらいの召集兵で、私は炊事班長になり一五〇人の給与をしたが、正式の班長は召集の年配の下士官でした。私は健康保護兵のとき、炊事の助手をしていたのでこの役を命ぜられたが、上の下士官は古いのでやりにくかった。

兵籍簿によれば、

「昭和十六年七月二十八日独立重砲兵第一大隊編時編成、昭和十七年四月六日、野砲重砲第五連隊補充隊へ帰還を命ず、四月十日旅順出發、同二十四日門司港上陸、同日補充隊到着、五月三日陸軍兵長、現役満期、同四日予備役編入」

とあります。補充隊は小倉でした。

除隊のとき、次の召集がくるぞと言われていて、早

く結婚せよとも言われました。勤務していた関西電力は休職だったので復職、親が決めていた従妹と、十月十七日結婚しましたが、戦時中の婚礼ですから、国民服、丸坊主姿、神社で質素なものでした。今でも、もう一度結婚式をやり直そうかなど笑い話をしている程の形だけの挙式でした。

昭和十九年八月十日、船舶工兵第九連隊補充隊入隊の召集令状がきました。同日船舶通信隊補充隊転属、十月二十八日、船舶通信第四大隊臨時編成が下令されました。同大隊に同月三十一日転属、と兵籍簿にあります。ですが、本部が上海で、私の行く小隊は台湾でした。

召集兵一五〇人で兵長は私一人だけで他は兵隊だけ。輸送指揮官は少尉で、その編成前に下士官五十人ほどの試験があるので「次に呼ばれた者は受験せよ」と言う。何だか分からなかったが決められた日時に行ったら、下士官が多く兵長は二、三人、他は曹長、軍曹、伍長。試験は軍人勅諭で、白紙一枚に礼儀の項を書けと言われた。

私はほとんど全部書けたと思う。「渡辺、お前は船

舶通信第四大隊本部の書記として、台湾へ行かず上海へ行け」と命ぜられました。単独で上海へとなると、輸送指揮官は台湾行きは兵隊だけだったので、私の上海行きに対し異議を申されたという。広島へ集まったのは、いろいろな部隊があつて、その中から適性を見られたらしいのです。

このことが私を死から生へ転換させた第二の運命の分かれでした。輸送指揮官の少尉の人は私と一緒に連れていくつもりでいたが、一五〇人の兵隊と十二月二十八日出帆、台湾へと行きました。

私一人は十二月二十八日、朝鮮経由で大陸へ、山海関、徐州、南京、上海と行きましたが、徐州あたりで敵襲がありました。私一人は軍服で他は全部中国人の客車だったので、四日間は寂しいというか、不安で熟睡できなかったが、無事上海楊樹甫の昭和島という小島へ着きました。そのこの大隊本部に着いたのが、昭和二十年一月五日でした。

私と別れた一五〇人の兵隊は台湾の高雄港へ着く前日、安平沖でグラマン機の襲撃を受け全員戦死してし

まいりました。奇しき縁と申しましょるか、ただ一人上海の本部へ書記として到着した私が知ったのはその悲報であり、その戦友たちの功績名簿、戦時名簿などを全部処理するのが私の仕事でした。

船舶通信第四大隊本部は上海ですが、厦門、広東、台湾などに分遣隊があり、通信、情報、通過艦艇との連絡などをするのが任務でした。私が上海へ行くまで、下士官試験を受けながら、広島から呉へ行き、軍用船に乗り込み、上海の本部へ状況報告し、別に兵站部から船舶の出発時刻や行先を聞いて本部へ連絡をしていました。先に申ししたように輸送船、軍用船などの連絡が船舶通信隊の業務でした。

昭和二十年六、七月ころ、上海から南京へ移動の命令が出て集結し、終戦は南京で聞きました。そこで待機中、書類という書類（人事、功績簿関係）は全部焼かされました。私は書記をしていたので、東京の陸軍省軍務局へ出す書類を作成し送付していました。一部は隊に残しておいたのだがそれも全部焼いたのです。しかし、自分の戦時名簿だけは記念とか記録とし

て密かに持って帰りました。

待機していた南京では、いつ帰れるか不明なので、自給自足のため百姓まがいの仕事をしていました。帰国は予想より早く、上海の呉淞港からLST（上陸用舟艇）で佐世保へ着いたのは昭和二十一年一月でした。頭から体中にDDTを撒かれ（しらみ、のみなどの駆除）復員となりました。

私の家は大阪だったので、通信で大空襲によって焼けたことを知っていました。しかし家族との音信もなく、帰国を知らせることも不能でした。恐らく家も焼けたはずと判断し、家内の故郷の岡山へ立ち寄りました。大阪は焼け、母の実家奈良の山奥の榛野町に疎開し、さらに家内は母の知り合い、大和高田へ疎開し物置で生活をしていました。父は空襲のとき、知人の荷物運んでいて転倒大けがし、それが原因で病床にあることも知りました。大正十五年生まれの弟は幹部候補生のままで帰っていました。次弟は出征中で未帰還（後八月ごろ帰国）ということでした。

私は、一月二十日ごろ、父・母・妻・長女の待つ大

和高田へ帰り、重傷の父に会うことができませんでした。父は死ぬ前「苦勞をかけたな」の一言を残して、一月三十日に死にました。家族の皆は、親父は私の帰るのを待っていたようだと言っていました。母は昭和三十六年に死亡しましたが、その間親孝行をすることができませんでした。私は、復員後、関西電力に復職し定年まで勤めることができました。

思えば、ノモンハン事件、高雄沖での海没と、百何十分の一の確率で私は生きて帰ることができました。もし、あのとき、胸部疾患にならなかつたら、船舶通信第四大隊要員一五〇人中ただ一人、本部勤務となつた下士官試験で軍人勅諭の礼儀の項を間違っていたなら、これが私を死から生へ転換させた運命だったのです。

また、中国からの復員の昭和二十一年一月とは最も早い帰還であり、そのため重傷の父親と会うことができ、父を安堵させ、あの世に送ることができました。弟も無事帰還、妻子も戦災の中生き延び再会できました。このようなことを思うにつけ、私は幸せであった

と思いつつも戦没戦友の冥福を祈る人生でもあります。

重砲兵第七連隊

沖繩戦で生き残れた私

沖繩県 島袋 全裕

私は大正十四年、那覇市で生まれましたが、本籍は戦前は西新町三ノ十三、戦後の現在は辻一丁目十ノ一、現住所は桶川一丁目二六ノ二四であります。

昭和十九年四月、国家総動員法、学徒動員によつて戦局が緊迫している沖繩で陣地構築に従事し、さらに海軍航空隊小禄飛行場（現那覇飛行場）設営隊勤務、十月、小禄海軍航空守備隊高射機関銃中隊が米軍機により襲撃を受ける。南西諸島大空襲あり対空防空戦に突入しました。これが我が現役入営する直前までの、沖繩ならびに私自身の状況であります。

昭和十九年十月十五日、沖繩守備軍である第三十二軍、與那原の重砲兵第七連隊（球四一五二部隊）に入